

# 環境変化で高まるCROの存在感

製薬企業の臨床開発職といえば、薬学部の学生にとって花形の職業の一つ。だが最近、製薬企業の世界的な再編、グローバル化の加速など、臨床開発を取り巻く環境変化を背景に、開発業務を受託するCROの存在感が高まっている。実際に、開発職を目指す就職活動は、製薬企業からCROへと中心的な受け皿がシフトしつつある。また、卒業生を送り出す薬科大学側も、6年制教育という大きな節目を迎えている。そこで、CRO各社の採用担当者に集まっていただき、開発職としてのCROの魅力や求める人材像などを語ってもらった。

## 2013年度採用へのメッセージ

シフトしつつある受け皿



保良 健治氏

—まずCRO業界を取り巻く動向を教えてください。

保良 日本CRO協会の年次業績を見ると、2010年で協会会員の総売上高は1100億円を超え、11年は1200億円を見込むなど、業界自体は成長しています。しかし、ここ最近では成長率が鈍化傾向にあり、業界として成長の踊り場を迎えているようにも見えますが、グローバル試験や抗癌剤の治験など、新しい成長の芽も出てきています。また、日本におけるCROへのアウトソーシング率が欧米に比べて低い現状を考えると、今後も業界全体が成長していくと思っています。

実際にCRO各社の採用活動も、新卒採用、中途採用共に非常に活発な状況です。特に各社とも、新卒採用に力を入れていく動きがあり、非公式ですが昨年比で新卒採用枠が約1.5倍に拡大しているとの話も聞いています。こうした状況から、CRO各社は13年

度採用に向けて、より新卒採用に力を入れていると認識しています。以上の通り、今後のCRO業界の見通し、そして採用傾向としても非常に明るい状況にありますので、薬学部の学生から多くの応募をいただければと考えています。

—CROから見た就職動向を教えてください。

井上 臨床開発職(モニター)に関しては、来年4月入社の方々を見ても、学生のニーズとして、依然としてモニターの就職志望が高い傾向にあります。特に薬学部の学生にとっては、4年制から6年制に変わったこともあり、卒業生が一斉に世の中に出て、調剤薬局や病院薬剤部、製薬企業の開発職、営業職(MR)と並んで、CROの開発職が数年前に比べて非常にクローズアップされてきていると実感しています。昨年12月1日から就職活動が始まりましたが、各薬科大学から言われているのは、新卒採用枠をもっと増やしてほしいということです。いまCRO業界は、成長期から成熟期に入りつつありますが、逆に薬学部の学生は、今が大きな就職ニーズの高まりの時期にあるように感じます。

中屋 ここ数年でCROに対する興味、理解度が深まってきている印象を受けます。大学で企業セミナーを行う機会がありますが、

## 座談会 「採用担当者が語るCRO業界」

### 出席者

日本CRO協会理事、新日本科学臨床事業部臨床戦略部長

保良 健治氏

ACRONET人事・総務部 採用統括マネージャー

井上 一成氏

メディサイエンスプランニング 経営管理本部人事総務部

中屋 昌宏氏

## 就「社」でなく就「職」を



井上 氏

以前に比べて学生が事前にCRO業界のことをよく調べていて、より具体的な業務への質問が増えています。そういった意味では、薬学部の学生のCRO業界に対する志望度が強くなってきていると感じることができます。

—製薬企業は、臨床開発職の採用を絞っていると聞きますが、こうした動向も関係していますか。

保良 製薬企業が開発職の採用を絞ってきているのは確かです。これは、CRO各社が信頼ある仕事を実績として積み重ね、信頼度が増したことにより、ますます開発業務はCROに任せるといった流れになっているためと思います。現在、臨床開発はモニタリングを中心に受託していますが、申請業務を含めた開発全般の受託も増加していますので、その

## — より良い薬が患者さんに一日でも早く届くことを目指して —

私たち日本CRO協会は、医薬品開発のアウトソーシングサービスを通じて、新薬開発と医療の発展に貢献します。

詳しくはこちらから!

日本CRO協会

検索



www.jcroa.gr.jp

広がる活躍の場 ~日本CRO協会会員総従業員数の推移~

